

第3回 3.11以降 読書会資料

1. アウシュビッツとヒロシマ (第一節～第二節)

相違点 (p. 32)

【アウシュビッツ】人種主義的で神話的なイデオロギーによって突き動かされていた。ヨーロッパおよびキリスト教に起源をもつ狂乱(反ユダヤ主義、純粋性への狂信的な志向)の極み ヒトラーの妄想はヨーロッパの産物

【ヒロシマ】「アメリカ合衆国が 自らが「新世界秩序」の次元にあり、この秩序を自らの印鑑をもって宣言することができる」と自認している権力としてはぐくんできた 支配欲」によってもたらされた。

共通点

- ・ 政治的 = 経済的 = イデオロギー的な支配という目的に使える、次の二つのものを創始した。
(1) 体系的に練り上げられた技術的合理性を有したさまざまな手段でもって、諸々の民族、諸々の人間集団を絶滅させるという企て (2) そこにいる人々のすべてを絶滅させ、その子孫までも削ごうとする企て (p. 30-1)
- ・ アメリカの日本に対する戦争が、アメリカがナチスドイツに対して行っていた戦争の延長線上にあり、さらに、ソヴィエト連邦を抑止するという同じ懸念を含んでいた (p. 31-2)
- ・ それらふたつの名は共に「文明全体のとも言うべきある変異に呼応した二つの名」である。すなわち、そのいずれも、(以前の文明とは異なり)「それまでめざされてきた一切の目的とはもはや通約不可能な目的のために技術的合理性を作動させるにいたった」(p. 32)・・・(*1)
- ・ 二つの名に共通するのは「境界」 道德、政治の境界、あるいは人間の尊厳の感情という意味での人間性の境界でもない、「存在することの境界、人間が存在している世界の境界」を越えたということ。言い換えれば、「人間があえて意味を素描し、意味を開始するよ^{センス}うな世界の境界」を越えたということ (p. 34)・・・(*2)
- ・ 両者は一種の「脱-名称化 (de-nomination) 脱形象化、脱構成化 しか名指さないよ^{センス}うな名」となった。・・・(*3)

(*1) 「それまでめざされてきた一切の目的とはもはや通約不可能な目的」が「通約不可能」であるのは、それが初めて「絶滅という尺度」にあわせて考案され計算された破壊をも必然的なものとして統合したからである。この尺度は以前のあらゆる殺人的な暴力に比して「尺度を超えたもの」「超過」として考えられなければならない。そしてこの「超過」とは、単に度合いが変わったのではなくその本性 (nature) が変わったということである。つまり、「抹消されるのが敵だけではなくになった」のだし、「集団的な規模での人間の生が、戦闘をはるかに超えたところにある目的の名のもとで絶やされる」こととなった。

(* 2) ヒロシマとアウシュビッツが「人間があえて^{サンス}意味を素描し、意味を開始するような世界の境界」を越えたとき、それらがどのような意味内容を有しているか ヒロシマとは何であるか、アウシュビッツとは何であるか は、「そのつど、世界の存在からは独立した領野においてしか理解されなくなる」(p. 34)。この領野は固有の合目的性(目的に適った性格)を有し、その合目的性が存するのは「この合目的性そのものの増殖」のうちであり、さらには「世界の存在やそこに生きるあらゆるものたちの存在とは無関係にそれ自身だけで通用するような形象ないし権力の指數的な増加」のうちである。

(* 3) 脱-名称化とは何か? とりあえず、正常な固有名の果たす機能とはどのようなものだろうか。たとえば「三島由紀夫」は固有名であるが、「三島由紀夫とは何・誰であるか」という問いかけに対してどう答えたとしても、それは不十分にならざるをえない。「金閣寺の著者」、「東京生まれ、東大出身」、「本名平岡公威」・・・等々と言葉を重ね、意味を連ねていっても、けっして「三島由紀夫そのもの」にはとどかない。固有名が表すのは、この世界のうちに存在する、比類なきあるひとつのものであって、上のような一般的な述語をいくら重ねても固有名が表すものと完全に一致することはない。したがって「固有名とは、つねにある仕方で意味作用を通り越すこと」、「それが意味するのは自分自身であり、その他のいかなるものでもない」(p. 36)。これに比べて、「ヒロシマ」や「アウシュビッツ」はどうか? 「脱-名称化」が正常な固有名の機能を逸脱することだとしたら、「脱名称化」した固有名の“異常さ”については二通りの予測が成り立つ。一方でそれは、ヒロシマやアウシュビッツはもはや「世界の中の」ものを指示しなくなってしまったということの意味するのだと考えられる。また他方でそれは、外見上は固有名でありながら(ヒロシマが「色」や「音」、「犬」などなんらかの種や類を表す名詞ではないということは明らかだろう)、「比類なきひとつのもの」を指示するのではなくなくなってしまったということの意味するのかもしれない。つまり、固有名の「脱-名称化」とは、固有名の指す「ひとつのもの」がもはや比類ないものではなくなくなってしまった 互いに等価な、交換可能なものになってしまったことを意味するのだと考えられる。(この考えはツェランの詩を解釈しやすくさせるかもしれない。) 当然、これら両方の意味を込めてナンシーは「脱-名称化」と言っている可能性もある。(ところで「貨幣技術」(p. 55) は固有名か? そうだとしたらそれは正常な機能を果たしているか?)

2. フクシマとヒロシマ (第 3 節 ~ 第 5 節)

共通点) 原子力エネルギー

相違点) 軍用 / 民事用 (p. 37)

この相違にも関わらず、哲学は アウシュビッツとかなりの共通点を持つように思われる「ヒロシマの後で」ではなく 「フクシマの後で」何を語りうるのか?

- ・ この「後で」が意味するもの・・・未来への志向ではなく、「宙吊り」の状態。
 - 西谷修) 未来などあるのか、つまり、未来などないということも(あるいはあったとしてもそれが破局的なものであることも) 可能なのか
 - 関口涼子) 「地震の四十九日後。これは仏教の慣わしでは魂が彼岸へと最終的にたどりつくと言われる日だ」
- ・ 問題は文明なのか? とりかえしのつかないものなのか? ...云々 (p. 39)

問題は文明の全体なのか？

- ・ しかし、軍事的な技術はその他の技術へと転用されたり、他の技術の転用であったりする。
- ・ さらには「戦争」という概念はかなりの程度その意味をずらしてきている。(p. 41)
- ・ また、原子力の「平和」利用について「敵無き戦争状態」が語られている。原子力エネルギーは軍事・民生問わず「究極的に持続可能な有害性」の問題を提起する。
- ・ さらにこの「有害性」の問題の「解決」は 原子力を断念することであれ、防御策をかなりの程度増やすことであれ ここでナンシーが暫定的に「進歩の」文明、「自然支配の」文明と呼ぶような文明の地平を離れない。もしも(たとえば有害性という)制約からの解放を望んだ「解決」が、逆にますます増える新たな制約への従属へと反転し、あらゆる進歩がわれわれの条件の悪化に置き換わってしまうとしたら、さらにはかつて人間の力であったものが人間自身やその他の存在者に対して自立的な力を決然と行使するようになるとしたら、有害性を除く責務と同じくらい緊急の責務と直面する事になる。(p. 42)

原子力エネルギーの問題は、それが軍事的に利用されるか/民生的に利用されるかの区別にはかかわらない。

さらには、原子力エネルギーをとりまく問題の「解決」は文明全体としてみればむしろ問題を増やすことになる。

- √ 「フクシマがヒロシマに付け加えるもの」とは、「何にも開かれていない黙示録、黙示録自体の否定にしか開かれていない黙示録という脅威」が原子力の軍事利用だけでなく、また原子力の利用全般にのみ従属しているのですらないということ。(p. 45)

とはいえ原子力の利用(民生にしる軍事にしる)にはわれわれの文明の諸々の特徴が深く刻み込まれているのは確かだ。特に原子力の軍事利用はこの布置の概観を示す。

- ・ 原子力兵器は抑止という戦略を生み出した。抑止とは「恐怖の均衡」である。
- ・ 恐怖はただ「それのみで働き」、なんらかの「関係を巻き込むことはない」。(p. 46)
- ・ 力と力の関係がいずれにせよひとつの関係であったのに対し、恐怖の均衡は関係ではない。すなわち、「緊張関係を平板化し恒常的なものとして保つことでこれを抹消するような等価性」である。(p. 47)
- ・ 原子力兵器は「絶対的な力」であり、それをういようとする意志に従属するものとしては考えられない。人間の決断が関わる当のものは、決断の効果として計算しうる一切のものを超過するまでになる。(同上)

ここにとりだされた「等価性」と「計算不可能性」が、さきほど予告された、われわれの文明全体の布置を特徴づけるものである。

3. 等価性と計算不可能性 (第6節～第7節)

【等価性】

- ・ 等価性とは、言ってみれば自分自身で自分自身を統治する力が有する性質である (p. 48)
Ex) 崩壊した原子力発電所、爆弾、原子力や兵器の力 etc.
- ・ 「〔車にとりつけられた様々な安全装置や、医学の領域における移植免疫と抑制物質、副作用を防止する物質等々の間に見られる〕こうした自己生成的、自己合成的 あるいは自己錯綜的、自己不明瞭化な 樹枝化を統べているもの、それが私が先に等価性と呼んだものである」

【計算不可能性】

- ・ 計算不可能 通約不可能 (p. 51)
 - ・・・・「同と他が通約不可能だということは、われわれの決断の力に立ち向かうものが計算不可能だということに帰着させることはできない」。たとえば、フクシマが「人間に対して、その地域に対して〔...〕どのような帰結を持つか」は「計算不可能」であるが、通約不可能であるわけではない。
 - ・・・・「通約不可能」なものは計算という秩序に組み込まれることのない。それは、人間、動物、植物、鉱物、神的なものといった「他なるもの」への「絶対的な距離や差異へと開かれる。(p. 51-2)
- ・ しかし今や通約不可能なものどももまた、種々の技術によって、それらの「他なるもの」という性格が危ぶまれている。(p.52)
- ・ 諸々のカテゴリー、実体、領域を計算の秩序へと組み込むことは、それらの「配置」を全般的に変容し、いっそう緊密となりいっそう網状化する相互関係、相互依存へと置きなおすことになる。こうした相互連結の主たる要素は「非常に大きな数というかたちで計算不可能なもの」である。

4. 文明の法則 (第8節)

- ・ これまでに記述された文明全体の布置を、フクシマという出来事が範例的なかたちで体現した。 (p. 54) 「というのもそれは、大地震、密集した人口、(管理の不十分な)原子力施設、公権力と私的な施設管理の複合的な関係〔...〕のあいだの緊密かつ粗雑な連関をさらけ出すものだからである」。 (p. 54)
- ・ 貨幣という技術はまた、等価性、計算不可能性、全般的な相互連関といった特徴を純粹状態で合せ持つ。マルクスは貨幣を「一般的等価物」と呼ぶことによって、次のことを表していた。

「あらゆる生産物は等価であり、交換可能で転換可能性というかたちで規定される価値へと、一切の価値が全般的に吸収されるという原則」 (p. 56)
- ✓ これこそがわれわれの「文明の法則」である。「そこでは計算不可能なものが、一般的等価物として計算されることになる」。